

に對しては依然軍政的な隷屬關係が残つてゐるものと解釋し、作戰以外の補給、人事等に司令部としての統制力を發揮せんとした。が陸軍では一旦指揮下に入つた部隊は補給、人事等作戰に關係あるすべての事項を指揮すべきであるとの陸軍流の解釋を下してゐたのである。

然しこの解釋の相違は兩者の話し合ひで或程度諒解は出來ていた、海軍では陸軍の作戰指揮下に入つた海軍部隊が戦闘に全力を發揮せしめ、陸軍の綜合戦力を高める爲、第十四方面軍司令部と密接な連絡を保ち乍ら海軍部隊指揮上参考となる意見希望等を開陳し、第十四方面軍司令官を援助してゐたのである。

ニ マニラの戦

(1) マニラ海軍防衛部隊の編成

昭和十九年八月迄はマニラには第三南遣艦隊に直屬する第三十一警備隊があつて比島北半の警備を擔任してマニラ、レガスピ、オロ

ンガボ等に派遣隊を有し若干の海上兵力をも指揮していたが同年九月一日警備隊を解除し第三十一特別根拠地隊がマニラに置かれ

警備擔任地獄も大体ルソン島に局限されたのである

然しこの兵力は最初は數百名を出でない少數であつてマニラ附近の地上兵力としては九月二十一日米機動部隊のマニラ來襲時マニラ、キヤビテに對空機銃各六門、ニコルス飛行場に防空隊一段を有していたに過ぎなかつた

然るに戦況の進展に連れ中南比方面への兵力輸送困難となりダバオ、セブ方面向け増強部隊でマニラに止るもの沈没艦船乗員で内地後送困難の爲そのまゝに止るもの激増しこれに加へて内地からの増強兵力の到着あり第三十一特別根拠地隊兵力は水ぶくれ式に増大したのである

一方第一航空隊所屬の基地部隊としてニコルス飛行場に北比航空隊本隊がありルソン各地飛行場に基地員を派遣していたがその

兵力は根拠地險固有兵力よりも遙かに多かつた
十二月中旬米機艦隊がミンダナオ海を巡てスル海を北上しつゝ
あつたときマニラは未だ純然たる後方基地であつてレイテ作戦の
策源地として働いていた爲直接の防衛に對しては何等の準備が出
來ていなかった

この機艦隊は或は一擧にルソン島に上陸するかも知れない状態
となつたので十二月十五日南西方面陸隊司令部では急遽マニラ防
衛計畫を實行に移した

かくて十二月二十日マニラ防衛海軍部隊を編成その指揮官を第三
十一特別根拠地隊司令官岩淵三次に指定しその指揮下に根拠地隊
兵力の外航空部隊海上兵力、工作部、軍需部、施設部、運輸部、
經理部、港務部、病院等の一部兵力を加へその兵力は一万五千名
以上となつたが何しろまるで意匠の混成部隊で根拠地隊司令部で
はこの編成訓練には多大な困難に遭遇したのである

尙この時機に別項にて述べるコレヒドル島防衛部隊も編成されその指揮官として第三十一根拠地は首席參謀板垣昂が指定された、この兵力には震洋隊六隊の外は沉没艦船乗員が主としてこれに充てられ特に軍艦武蔵の乗員がその主体となつた

昭和二十年一月米軍がリンガエンに上陸した後マニラ海軍防衛部隊はその編成の完成を急ぎ一方マニラ方面にある多數の非戦闘員をパヨンボン方面に送り出す爲一月中旬迄かゝつたのである

マニラ海軍防衛部隊は五箇大隊編制であつた

(四) マニラ防衛計畫

マニラ防衛作戰の根本方針はコレヒドル島及マニラ市街を死守することになりマニラ灣及マニラ周邊の航空基地を利用せんとする敵の意圖を封じルソン作戰を有利に導くと共に敵の次期進攻の時機を遅延せしめんとするものであつた

従つてマニラ及コレヒドルの防衛は海軍としては最初からこれを

一二

0223

死守する覺悟を持っていたのであるがレイテ作戰の完遂と航空戦備優先の大方針に依りマニラ、コレヒドル等の地上防備の強化は昭和十九年十二月中旬迄はその運びとならずコレヒドル以外の防備は國軍に依存せんとする傾向が強かつたのである

ところが米軍のミンドロ進攻に依り比島の日本海軍としては固有の任務を放棄し地上戦闘に轉ずる時機の切迫を語り十二月中旬蘭軍のルソン作戰方針の決定と共に國海軍間に作戰協定が出來上つた

この現地國海軍作戰協定に依るとマニラ防衛の海軍部隊は陸軍マニラ防衛隊司令官小林中將の指揮下に入りこのマニラ防衛隊は更に振武集團（第八師團並聯）に属していたマニラに於ける海軍作戰擔任地域はバシグ河以南のマニラ市街ニコルス飛行場、マツキンレー方面及その海岸線であつてバシグ河以北は陸軍部隊十七箇大隊を以つて防備することとなつていた

第三十一特別根據地司令部ではこの協定に基き十二月下旬から
マニラ市街の防備工事に着手し擔任地境を各大隊に區分し各區域
内に據點の構築を開始し主として海正面及南西面から來攻する敵
に備へた陣地を計畫していた

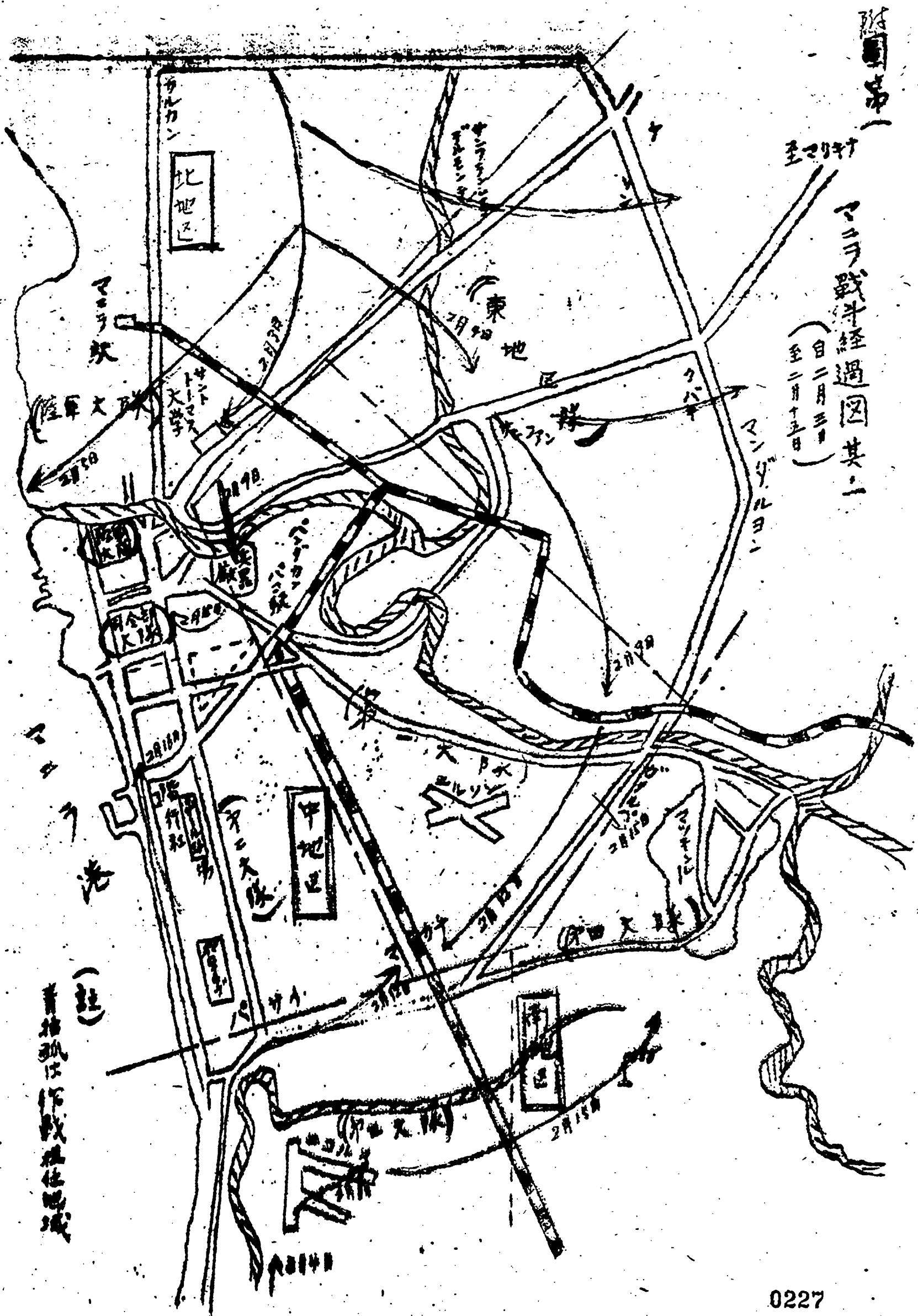
ところが昭和二十年一月に入り陸軍部隊は作戰計畫變更を理由に
河北に三箇大隊を殘し精銳十四箇大隊をかねてから準備中であつ
たマニラ東方山中の復讐陣地に轉進せしめマニラ防衛司令官自身
もモンタルバン方面に後退しマニラの防衛指揮官を第三十一特別
根據地司令官岩淵少將に指定した

この突然の計畫變更に最も當惑したのは岩淵少將であつた陸軍の
後退に依り北正面の防衛兵力に大不足を來したので海軍兵力も北
正面の防衛を顧慮せねばならぬ故目に陥り一月中旬に至り敵を目
前に控え防衛計畫は全面的に再檢討を餘儀なくされた
又海軍部隊でもこの頃モンタルバン方面陸軍據點内に後方補給基

地を作る必要を感じ一部隊を先發せしめ軍需物資の集積等に當ら
しめた

かくて二月上旬のマニラ防衛部隊は岩淵少將の指揮下に海軍六箇
大隊、陸軍約三箇大隊の兵力となりバシグ河以北は陸軍部隊擔任
とし北部隊（指揮官野口陸軍大佐 陸軍二箇大隊兵力約三〇〇〇）
を配しその東方には東地區隊として海軍獨立一箇大隊を配した河
北の市街地は岩淵少將直轄の四箇大隊を配しこれを中部隊と稱し
その南方ニコルス飛行場に第三大隊、マツキンレー兵營に第四大
隊を配しこれを南部隊（指揮官古瀬海軍大佐）と稱し又その南方
ラグナ湖畔に陸軍一箇大隊を配しこれを古瀬大佐の區處下に置い
たのであつた

（附圖第一参照）



附圖第一
 マニラ戦経過図其二
 (自二月三日
 至二月十五日)

(註)
 青線は作戦進路線

(ハ) 經過の概要 (附圖第一、第二参照)

(1) 昭和二十年一月マニラの状況

昭和二十年一月三日米機動部隊が台湾、沖縄方面に來襲すると共に大輸送船團がスリガオ海峽を通過してミンダナオ海に進出したとの情報があり米軍が討作戦を開始した兆候が顕著となつた

一月四日には台湾方面依然機動部隊の來襲があり又英機動部隊が北部スマトラに來襲した

一方日本側の比島に對する輸送作戦は次第に困難となり一月二日北サンフェルナンド沖合で一船團はミンドロ方面の基地航空部隊の空襲を受け激しい打撃を蒙つた

五日午後マニラの南西方面艦隊司令部はマニラ灣西方海面に大船團が北上中なる旨の電報を入手したこれは明らかに米軍がルソン島北部に上陸せんとする行動であることを物語つていた

司令部では直ちに會議を開きかねての計登に基き司令部をバ
ギオに移轉することに決定した、これは第十四方面軍司令部が
既にバギオに移轉しあり國海軍の協力を緊密にする爲に必要な
る位置であり又ルソン作戦の方針である堅強な持久作戦を行う
爲には司令部を興地に置くことが必要と認められたのである
司令部移轉の際一部の幕僚はマニラに殘留し根據地除司令官の
防衛設備の援助に當ると共に在マニラ海軍諸部隊（主として非
國部隊）處理に當つた

南西方面艦隊司令部は六日バギオに移轉を完了した

米艦隊は六日リンガエン灣に侵入し七日サンフェルナンド、ダ
モルテス間の掃海及正確射撃を実施し一月九日米軍上陸部隊は
遂にリンガエン灣に上陸を開始した

マニラ防衛部隊指揮官岩淵少將は茲に於て、急戦備を固め部隊改
編陣地強化等の混雜態にもマニラは策源地の性格より急速に市

街戰陣地に轉換して行つた

一月十六日モンタルバンに於てマニラ方面作戰陸海軍部隊指揮官の作戰會議があつてマニラ防衛に關する最後の打合せがあつたのであるがマニラ方面陸海軍最高指揮官振武集團長（第八師團長）より陸軍の抱くマニラ防衛作戰方針の指示がありマニラ防衛戰は岩淵少將を指揮官とする海軍部隊を主力とし一部陸軍兵力をその區處下に置くことに決定した、振武集團長は主力を率いてモンタルバン方面山岳陣地に引きこもりマニラ防衛戰の側面掩護を企圖していたのである

一月二十二日夜間砲艦唐津はマニラ在泊の最後の艦船として出港し脱出を圖つたのであるが遂に突渡すること出來ず引返しその乗員は陸戰に参加することゝなつた

一月二十五日艦隊司令部のマニラ殘留幕僚はパヨンボンに引揚げ北方の米軍は既にクラーク飛行場附近迄進出した一方三十日には

スビツク灣三十一日にはナスグブに敵上陸の報を得たのである
茲に於てマニラではキヤビテ地區の守備隊も二十九日マニラに徹
退を命ぜられた

(2) 第一期戦（二月十日迄）

二月一日岩淵少將はかねての計畫に依りマニラ埠頭施設等の破壊
を命じその部下に對し「全員將攻隊となり來攻の敵をマニラに徹
撃し必死必殺以て戦局の一轉機を畫すべし」と訓示し又友軍にそ
の決意を傳へて「隊員一同希望に輝き意氣に燃え念頭唯敵撃滅さ
るのみ」と云つてゐる

二月二日マニラ北方三十軒に米軍出現の報あり三日には戦車三〇
装甲車一〇〇を基幹とする兵力ノバリチエス街道よりマニラ市内
に進入し來り直に俘虜收容所たるサントトーマス大學に侵入した
又ケソン橋北方より出現の敵はマラカニヤン宮殿、サンタクルー
ス橋方面に進撃し來つた

又市街内には各所にゲリラ部隊蜂起し電話線一斉に切斷され北
地區の國軍部隊内の電話連絡に支障を與へた

この日アラヤ橋及ケソン橋を爆破し海軍部隊は一部兵力を川北
地區に残し米軍の渡河を阻止した

同夜振武集團司令部はマニラ所在國軍部隊を海軍の指揮下に入
れ自らはモンタルバンに撤退した

マニラの中心ルネタ公園にはこの日から既に追撃砲彈が落下し
始めた

四日に入りバシグ河以北の日本國軍守備兵は築港方面を残し續
々と南岸に撤退しアスカラガ以北は米軍の占領するところとな
り河北一帯は大火災となつた

一方南正面では四日午前バラナケ方面に米軍落下傘部隊の降下
あり同夜有力なる敵はバラナケ橋を攻撃し來り一舉に之を突破
し一部の米兵はバサイ地區迄進出したが守備隊善戦して之を撃

退したこの夜南地區では中隊長自ら約三〇名を率い斬込を行ひ
又約二〇名は海上から敵の背後に逆上陸を企圖したが大なる成
功は收め得なかつた

五日になると北地區の敵はケソン方面にその主力を集中し始め
市街の東方を包圍せんとする企圖が察知され既にカルカン飛行
場を使用し始めた

北方からする米軍の壓迫は愈激しくバシグ河北岸の火災は益々
延焼を續け米軍迫撃砲は漸次その威力を發揮し之に加ふるに住
民の移動甚しくなり日本軍の戦闘に支障を與へたのみならず比
島人ゲリラ部隊と一般住民との區別つかず日本軍を極度に悩ま
し始めた前日米日本軍はマラカニヤン宮殿附近の米軍陣地に砲
撃を集中し特に噴進砲は大いに効果があつたが弾數極めて乏し
く充分の戦果を擧ぐるに至つていない
サントクルーズ橋及万才橋はこの日日本軍の手で爆破した

六日七日東地區方面の露力漸次増加し七日クバオ十字路を突破
さるに至り日本軍東地區陣地は著しく弱化し、八日クバオより
侵入した米軍の爲中央を突破蹂躪され日本軍は對戰車特攻攻撃
を實施したが大なる成功を収め得ず各據點潰滅し亂戦の爲指揮
不能に陥り地區隊長はマルキナ方面に轉進を令し逐次東方に撤
退した

一方バシグ河を挟んで對峙中の戦線は七日マラカニヤン宮殿及
サンミクエル、ビール宮殿方面からの米軍浚河開始に依り緊迫
し七日夜は日本軍は總豫備隊をパンダカン地區及タバカレロ煙
草會社方面に注入し斬込を強化すると共に海上特攻隊の出撃を
行つたが南岸の一部は米軍の占領するところとなつた、八日は
パンダカン方面で激戦あり同夜バコ驛の線に後退し煙草會社、
中之島方面は激戦を續け爭奪戦となつたが九日にはバコ驛兵器
廠台灣電力會社の線は米軍の占領するところとなつた

この日岩淵少將はマンキンレー兵營にある南地區隊本部に移動し更に參謀一名を戰況説明の爲モンタルバン振武集團司令部に派遣した

二三

この東地區隊の潰滅、パンダカン地區の喪失、司令部の移動等は市街守備の日本軍に若干の動搖を起さしめた

南地區隊はマンキンレー兵營ニコルスフィールド飛行場の線に陣地を構築し南方よりする米軍の進攻を阻止していたが海岸方面より逐次陣地を突破され六日には飛行場に米軍侵入し來り七日には飛行場より海岸線間に布陣している第三大隊方面の戦線は彼我錯綜し各陣地は孤立戦闘となつた

十日に至り南方の敵はバサイ兩邊地區を突破し來り第三大隊は海岸方面より東方に壓迫され漸次マンキンレー兵營方面に撤退し十一日にはマンキンレー兵營の南地區本部は早くもモンタルバン奥地に引揚ぐるに至つたのである

0235

十日北東地區ではバコ、バンダカン、マツカニヤン方面で激戦あり日本軍は主として新込を以つて反撃したのであつた、この日北東方の敵はガダルバ附近バシグ河に架橋し日本軍の退路を遮断する作戦に出でた、この爲ニルソン飛行場方面配備の第一大隊は二分され東半の一部はマツキンレー方面に後退した

(3) 第二期戦（二月十一日以後）

かくてマニラの戦は第一期を過ぎ郊外配備の日本兵力の大部分は東方に敗退し市街には海軍四箇大隊、陸軍二箇大隊を基幹とする部隊が包圍されるに至つたのである

この日は丁度紀元節であつたが岩淵少將は敵中を突攻本部に復歸し全軍の志氣を鼓舞しマニラ死守の決意を示した當日の戦線は北はバシグ河東はルナ、バコ市場、バコクリークの線南はボロクラブの東西線であつた

包圍環を完成した米軍は十二日頃より市街陣地に砲撃を集中し

た爲日本側は第一線は勿論後方各陣地共兵器の被害續出し敵を
見ずして河半截の火炮を喪失するに至つたのである

又一方日本軍の火炮は親潮の不良と彈藥の缺乏に依り大なる效
果を擧げ得ず十二日頃高角砲、迴擊砲、噴進砲の大部は彈藥を
擧ら盡し兵器を破壊處分するに至つたのである

市街端とマツキンレー方面との連絡は十二日以後完く杜絶した
十二日國軍司令部に派遣の根拠地隊參謀マツキンレーに歸着し同
所より無線を以つて根拠地隊司令部へマニラ東方陣地に據る國
軍主力部隊の作戦を次の様に打電した

「ノバリチエス、ッソン、マリキナ、マンドルヤン、バシグ方
面に各一箇大隊潛行所込を敢行す發動十三日夕刻、決行時機十
六日夜半マニラ防衛部隊は該時期に總員所込を行い包圍線を
突破するを可とす」

マツキンレーに撤退した南池區隊は同端よりニコルス、ニルソ

ン兩飛行場方面に連夜断込を續行し市街地との連絡を策したが成功せずその後逐次マツキンレー方面に壓縮され十五日には兵營の南、西、北の三門の線で戦闘が行はれるに至つた

市街地の戦闘は十三日バコ墓地南北線、シンガロシ、ロザリオの線で行はれたが十四日には収烈な砲撃と共に東方戦線中央部に進出し來り十五日にはバコ市場附近より進出し來つた戦車の爲大東亞軍の線迄戦線は後退した

この頃よりマニラ防衛部隊の撤退をめぐり陸軍振武集團司令部其の他と根拠地隊司令部の間に次の様な電報の往復があつた
振武集團より根拠地隊司令部へ

「一我が反撃は概ね順調に進捗しつゝあり

二野口及「マ」防（小林兵衛）（註、いづれも陸軍のマニラ

防衛部隊）は前命令に基き挺身断込を強行すべし

三マニラ海軍防衛司令部は爾後マツキンレーに位置し集團司

二七

0238

二八
司令部と連絡を密にすると共に該地附近の守備を強化し之を
確保すべし」

マツキンレーよりマニラへ

「本日振武より司令部のマツキンレー移動發令せられたるも突
發次第に困難なる現狀に鑑み今夜（十五日）直ちにマツキン
レーに集結せらるゝを可と認む、司令部轉達せらるゝや」
マニラよりマツキンレーへ

「實行せず」

岩淵少將より南西方面陸隊司令長官へ

「小官非才の爲多くの部下を殺し任を全うし得ず事茲に至る眞
に慚愧に堪えず

然れども除眞は最善を發揮奮戦し餘すところなく吾等は世紀
の戦闘に際會し畢生の御奉公をなす機會に恵まれ衷心歡喜し
感謝措く能はざるところなり

いでや殘存兵力を拂ひ射らまくり、切り港くり目に勿見せん
謹み畏みて天皇陛下の高歳を壽ぎ奉る最後の一兵迄敢闘する
決心なるも通信社通を考慮し御挨拶申上ぐ」

岩淵少將より振武集岡へ

「市内據點の持久は大局上極めて重要と思考せらる所此の際司
令部轉出は作戰遂行上相當支障あり又マツキンレー據點との
海上連絡を試みたるも成功せざる實狀に鑑み脱出不能と認め
らるゝに付き然るべく御容赦願度し」

十六日十七日頃鐵線は北は城内、東は大夏亞通り南はリザール
球場附近の東西線となつていた

十六日夜防衛部隊は一度出撃し東方移動を企圖したが敵陣地層
を突破すること不能、同日マツキンレー兵營の友軍は一部兵力
を残し撤收を開始し十八日アンチボロに集結した

十七日に陸海軍間に次の電報の往復があつた

振武よりマニラへ

三〇

「一、集團は爾後マニラ」附近の戦線を整理し後方據點に於ける戦鬪を準備せんとす

ニマ海防（國軍野口部隊を含む）は兵團兵力の攻堅に即應し十七日夜以降全力を以つて敵を強猛突破し先づマリキナ河畔に戦線を整理し敵の東進を阻止すると共に爾後東方據點内への轉進を準備すべし

（以下略）

振武よりマニラへ（十八日）

「一、河島、小林のマニラ周辺攻撃は十八日夜を以つて一先づ終り爾後斬込のみとなる

ニ貴族の突攻は十八日夜を最通とす

三、突攻方面時機通報あり度

四、マツキンレー兵營は敵侵入せるも未だ確保しある模様」

0241

マニラより振武へ（十八日）

「一旦出撃を企圖し計畫をたてたるところ到底夜中に市外迄突破は難かしく全滅は火を見るよりも明らかなり此の儘籠城せば後一週間は持ち得べく問題は各據點の持久と敵に如何にして多大の損害を與へ得るかとの二點にあり元來の強味は固定的なるところにあり此處を移動せば微力となるを以つて極限迄持ちこたえ最後に總員必死必殺一人一殺にて可なり突撃可然と思考致すにつき御高配辱なきも主作戦指導上當際に考慮せらる事なく計畫實施を進められ度只敵迫（註、迫撃砲のこと）を制壓し下されば結構なり」

振武よりマニラ（十八日）

「櫻據點（註、マツキンレーのこと）は目下亂戦中なるも保持しあり櫻より一〇〇名以上をアンチポロに收容せりバング以南には毎夜舟艇を準備す」

振武よりマニラへ

三二

「一、我敵に臨する意見受領す、リンガエンに於ける戦訓よりするも米軍の夜間突敵は困難ならず

ニ、已むを得ざれば貴司令部（所屬の兵力共々）を以つてパロノイ方面又は海上にて南北に迂回を企圖する等再考を望む現にカロカン、ケソンに各一箇大隊潜入活動中

三、右如何に拘らずカロカン砲兵には各部隊より二十一日夜より、優勢挺身斬込を取行せしむ

十八日マニラ市の日本軍據點は逐次火災の爲破壊しつゝあつたが岩淵司令官は「今夜十一時を期して陸海軍全員最後の斬込を執行す各隊共三日間の糧食彈藥を持ち海軍部隊は司令部に集合すべし」との命令を出したが同夜十時頃より司令部附近は集中砲火で部隊の集結不能となり斬込は中止となつた

十九日に入ると各據點は廢墟の中で交戦を繼續する情況となり

0243

埠頭地區より大發丸木舟にて脱出を圖るものが出て來た
この日マツキンレーの殘存部隊も遂に撤收してアンチポロに向
つた

二十日米軍の戦車は既にルネタ公園一帯に横行し日本軍は據點
内で之と交戦することゝなり城内の陸軍部隊も逐次埠頭方面に
後送した

十九、二十の兩日司令部からは一〇〇名以上の斬込隊を出し脱
出を企圖したが不成功に終つた

二十一日日本軍の據點は司令部、陸軍部隊本部、市役所、
マニラホテル及バング河を以つて圍まれた線以内竝に舊第四航
空軍機舎の據點のみとなつた、同夜陸軍部隊よりは小人数の斬
込隊多數出で又約三〇〇名は大發にて魚雷艇の警戒する港内を
脱出しマラボン附近に上陸した
かくて岩淵少將は多數健在者を斬込に出し自ら殘員を指揮し司

令部の據點を死守していたのであるが二十一日海軍全般に對し
最後の電報を次の様に打電した

三四

「勇士相次いで斃れ盡るは草屬及弱者のみにして今次大戦に再
起奉公の望みなき者、尤も有爲の士相當あるも此無ければ戰
は出來ず茲に最後の御奉公可然なり

單なる玉碎は小官も取らざる所なるも一つでも多く敵の首を
取らしてやり度、小官茲に一同の最後を見届け度御蔭にて待
難き數々の体験を得感謝にたえず」

爾後各據點毎に包圍さるゝことゝなり遂次破壊され行き二十二
日には遂に司令部、議事堂、市役所、城内及三船司の各據點を
殲すのみとなり二十四日市内部隊と外部との通信連絡は杜絶す
るに至つた

二十五日參謀一名外三名最後の連絡に出で内二名脱出に成功し
た二十六日未明岩淵少將等幹部は本部陣地内にて自決しマニラ

0245

防衛戦の悲劇は終幕となつたのであるがその後尚各據點の殘存者奮戦を續け戦闘の全く終熄したのは三月二、三日頃であつた

註、本戦闘記事は第三十一特根殘務整理班が終戦後編纂した「マニラ防衛部隊の戦闘状況」を資料としたものであるが生存者の記憶を綜合したものであつて不完全の點がある